

東
藝
太
夫
評
記

初
編

内田茂文著

東京義太夫評定記

初編

義太夫雜誌社發行



序

艷氣を賞る粹がりゝ進んで世話のサワリ茂聴け。滋味を
 喜ぶ通がりゝ去て時代乃サビを味へ。巧かろう拙かろう
 の評判は八十人十腹百人百色。獨り其人々の心々に有つて
 存するのみ。我を誇る藝も他之を誹し。我耻る伎も世之を
 褒るで持つたもれ。彼此の評判。兎角此沙汰。世間乃噂。品定
 る。藝人諸氏も其身の薬石と反省せを思ひ半過るもの
 あらん。此書忌憚を顧とせヒッ書く評も斯道の爲め聊か
 益のなからずやと。思ひ染めある筆任せに綴り擧げ題し
 て東京義太夫評判記と名くと云爾

明治乙未臘月
 茂句念
 内田茂文
 識

○
 一本編の伎藝の優劣又は人氣の有無等を以て順序を定めざるものあり
 らせ只だ得るが儘編入せしものあり
 一本編に漏るる男女義太夫素人連並びに三味線彈等は追々編と次で出版の目的あり
 一本編は倉卒の急稿なれば間々字句傍訓の誤り又は紋形等に多少の誤謬なきと保たざる看客幸ひに了承する所ある

目録

○男義太夫の部

綾瀬太夫 播磨太夫 組太夫 相生太夫
 駒太夫 織太夫 朝太夫 識太夫
 津賀太夫 新呂太夫 若濱太夫 緑太夫
 柳適太夫 阿蘇太夫 美濱太夫 和國太夫
 鏝太夫 花太夫 磯太夫

○女義太夫の部

小清 小政 素行 小住 熊梅
 越子 綾之助 土佐玉 小房 呂久助
 小土佐 新吉 豊子 小大 土佐吉

○素人連の部

和十 鱗 高森 桃司 紫山 花柳

梅糸	和紫	一幸	勇遊	孝玉	胡蝶
文清	梧曉	士調	二葉	廣玉	吉野
吉勝	松鶴	笑花	狂樂	友花	光昇
愛玉	錦	照尾	得司	壽鶴	白遊
勝長	吾豆	馬遊	喜樂	歌樂	喜雀
岩勢	都昇	登代	喜多	美津江	蝶吉
わか	小きん				

○三味線彈の部

野澤語助	鶴澤豐造	鶴澤蟻鳳	鶴澤清六
豐澤松太郎	鶴澤門造	野澤豐吉	豐澤廣兵衛
野澤勝造	鶴澤大造	豐澤團八	野澤吉彌
野澤鶴助	豐澤惣太郎	野澤芳三郎	豐澤廣三
合計	九十四人		

經歷

初め鶴澤芳二郎の門に入り、後ち四代目友治郎。竹本長門太夫と就く。學び相生太夫と名乗り慶應二年上京し、外神田薩摩座にて初興行。明治の初年綾瀬太夫と改名し、全十年一度歸坂し、後又上京して一と度東京義太夫の頭取となり、今現に取締役たり。



竹本綾瀬太夫

先づ當時義太夫界の大立者。玆處俳優ならば市川團洲とも謂ふ可く其語り振の溢さ。聲に寂を帯びて一段中の人物。演詞に依りて夫々貫目の分る所丈の獨得。專賣とも云ふべし殊に善惡の笑ひ分けなどに至りては他に眞似人のなき伎藝。十八番の物語を多き中最も優れて好評なるハ娘景清日向島宗玄庵室。佐々木隱家。忠臣藏四段目。盛衰記逆櫓。本藏切腹。菅原寺子屋。五斗兵衛生醉等なり。元來丈ハ落付に富みて躰度のこなし最も尋常に泰然自若。語を出して神聖あるものと宛から満場水を打し如く密そりとして悪冷評の聲絶て起らず喜怒哀樂着々と聽客の膈に染渉るなど流石に老練老技。實に聲曲界の泰斗と謂ふ可し。

凜として花の王なり白牡丹

經歷

江戸の産に玄
嘉永六年先
代鶴澤清六
從とて學び
鳳の名乗る
應の初め紋
衛門を改名
兩國結城座
於て興行。後
ち四代目花
伊左衛門初
五代目伊左
門となる明
十五年四代
播磨太夫と



竹本播磨太夫

人氣の大王とありてヤンヤの喝采伐一身に纏めたりし紋左衛門。改名後新聲館の祖となりて伎藝を鳴らせしも何と感ゼッて脱して新睦派の旗幟を翻へし。新呂。和國を前に置きて各席を切て廻る此頃の勇氣は紋左の昔し及はせもわれ伎藝の程の中々衰へず。瑤音朗々として梁上の塵を拂ひ抑揚流暢。玉を轉がす咽喉の艶。心耳澄み涉つて胸中を洗ふの感あり流石は一方の大將株。其語物中。廿四孝十種香。博多小女郎。信仰記爪先鼠。お俊傳兵衛堀川の如きは尤も秀でたるもれなり。今睦派が渦勢の如き大軍に當つて怯まぬ丈は勇膽。先は曲界孤島の大王と謂ふべし

冬ざれの色とも見せ松一と樹

經歷

初め鶴澤文造
に從ひ後五代
目春太夫の門
組入り六代目
文樂座に出勤
す春太夫没後
わに弟子なる
越路太夫を飯
の師とし明治
十七年全廿六
へ出勤全廿一
年團平廣助の
幹旋にて大隅
太夫と俱に番
附面橋下に顯
はる全廿四年
上京し茅場町
宮松亭にて初
興行す



竹本組太夫

世話物も巧みあるもの時代物に拙たは斯道乃常なるにも拘らば丈は此の二者を併せ兼て而も是に十八番の得意物有り先時代物にては伊賀越大廣間。檻樓錦大安寺堤。世話物にてはお染久松油屋など最も勝れたるものなり。

丈が語り振り確りとして聲に足みなく稍々古風あれば艶受。ケレン好みの人には喜ばれざるも少しく義太夫を齒み分る者をして耳を傾けしむる伎藝ケレン澤山にのみ客受を計り素人張を研究する太夫と日を同ふして評すべからず。且丈の滑稽に巧にして油屋チヨイノセの段の如きは越路乃帶屋と一般日本一の高評空しかる聴者。臍を縛り腹を抱へる可笑味實に誠。油屋は此丈に止先たり

餅確と答へて可笑し雜糞腹

経歴

嘉永元年正月
西京の生る十
五歳の時始て
竹本山城大椽
の門より入り
竹と稱す明治
六年十月綾瀬
太夫の門弟と
なり相生太夫
と改む全廿一
年十二月四代
目組太夫とな
り全廿三年下
阪し前名相生
太夫にて文樂
座へ出勤廿七
年十月東京陸
派席れ招き上
京應じて再び



竹本相生太夫

目下艶物の太夫に指を屈し來る時の津寶。朝の二丈と丈を併せ敷ふべし。然して丈は強ち艶物のみに限らず。元來音聲に富みたる咽喉なれば何を語りても調子ユツタリとして苦しからずサモ樂々節の廻る優美さ。流暢さ朗々せして佳境に入るときは聴き居るも乃我知らず其節の尾に付て語り出さん計り。梁上の塵もや掃はんとは蓋し丈乃如きを謂ふなる可し。丈が語物中。三十三間堂平太郎住家。明鴉山名屋。堀川猿廻し。三勝半七酒屋等は尤も高評なるものあり。斯の優美なる艶ありて和田四郎のドスも利けば三枚目の彦六。可笑の興次郎。老人の宗岸なども決して悪からぬ咽の程天晴な伎藝。各席盛る高評と誠々道理なりけり

鶯や聞けども飽かぬ日一日

経歴

系祖の今を距
る百三十餘年
の昔。遠く寶
曆年間元祖豊
竹駒太夫(奈
島喜教)お起
る初め廣見太
夫と稱し中頃
富太夫と名乗
る後太夫と名
駒太夫に從ひ
明治廿五年一
月六代目駒太
夫となる現今
斯道の副頭取



豊竹駒太夫

現今義太夫節の副頭取。後進輩の稽古に餘念なく塵を避けて淺草馬道に隠れても隠れぬきは丈の咽喉。節廻し奇麗にして調子よく時代の大物より世話場の艶に至るまで巧みにコナざるは伎藝まへ。流石は系圖正しき六代目の家柄。誠や名將の下に弱卒なしとの譬へに漏れず門弟の女太夫に越六。照吉。駒子など何れも師匠と仰がるは弟子の譽れは師の譽れ。即ち丈の薫陶の下に育て上げたる結果なるべし。宜なり名望信を負ふて副頭取の大任に据へらる亦ゆへある哉イヨ馬道の駒師匠と申し舛

家柄の紋にも見へて雜煮椀

經歷

初め前の織太夫(後)の門に入
夫(後)の太夫と
稱し後殿母
明治十年の頃
網太夫と改名
上京し一度歸
坂名し再び上
改名し再び上
京全十六年師
業の爲又々修
坂し文樂座へ
出勤本年三月
亡師七回忌を
營む爲上京す



竹本織太夫

此人何を出しても一二箇所は自家の機軸とも言べた所あり將來名人の地位に進まんものは古格のみ拘泥せ必せや衆人に異なる所なければならぬと日外義太夫雜誌の評に見へたが實に誠マアそんな物か。丈は他の太夫と語り振りの異なる所が却けて丈の價値の有る處よして眞似ても得べからざる皮肉の味ひあり利生記舟宿の段の如きは丈の得意の物とも覺しく屢々聴けども更に飽かず。壺阪。沓掛。伊勢音頭。伊右衛門住家など何れも旨い物。總じて丈はチャリめさし物尤も得意にして一種の異調克く聽客の願を外し前席の愁歎場に絞りし涙のハンケチも丈の滑稽み接しては思はず笑をの涎に濡す又至る又得易くらぬ伎藝と謂ふ可し

吹まざる風に紛れ萩の聲

經歷

明治六年始め
染太夫の門に
入り紅子と名
乗る同年十二
月朝太夫と改
名各席に出
勤七代目染太
夫武州岩槻に
歸るに及んで
八代目染太夫
の門に入り



竹本朝太夫

誰やらの呉服合せに丈を京御召に見立。優美にて品もよけれと語り物(否)機に依りての聲オット糸に太細の出来不出來あり兎角男にの向き悪く何しても婦人好まざると言ひまの蓋を適評りも知れ併し堀川の鳥部山。明鳥山名屋をぞと來ては玉を轉がす咽の艶。語り來りて餘音嫋々管に婦人向のみならず男子も好む所謂四方向の語物と謂ふべし。續いて小春治兵衛紙屋。三十三間堂をぞも丈が得意の五指に數へ折らぬもの。旨い事請合なま去乍ら餘り素人受にのみ骨折りてケレンに過ぎるなどと駄評の半疊を打ち込む者もあれば御氣注をられて願ひ升と云ふのも矢ッ張り丈を最負に思ふからの老婆心のみ

花の艶たしのみ見たり朝櫻

經歷

十七歳の時より斯道の志し明治八年呂太夫の門に入て宮太夫と稱し各處に出席全十年六代目綱太夫の門目となり三月師と俱に上京織榮太夫と改名翌年八月歸坂し全十三年八月再び上京して識太夫とあり全廿一年三月より眞打の看牌を掲ぐ

經歷

初め前の鞞太夫に從ひ小組太夫と名乗り各席に出勤し次で古鞞太夫と就て學ぶ古鞞の没後、住太夫に就き和佐太夫と改名し後ら播磨太夫に從ひ明治十八年五月五代目津賀太夫となる



竹本識太夫

人によりて好不好はあれど丈の語り振り何時を確りとして旨味には相違なし。併し躰度のみなし餘りに大袈裟過ぎて身振り半分語り半分。見臺で一人芝居多どと冷評を利くも乃爾れど弁は一を知りて二を知らぬ者の言草。音羽屋の反身も遊三の癖も敢て藝の障害とならず却つて之が興になると考へる日にや惡心處が無くて叶はぬ藝の一ツ。丈の身振は丈の專賣。明鴉の彦六。四ツ谷の權平。阿漕の彦作など演詞といふ身振といひ巧みにユナサれ茶理にて落を取らるゝ伎は恐らく丈が一等なるべし凡て語調の緩急抑揚中々お手に入つた物にて語物に依りては他に比類なげ旨味あるは久しを耳に忘れぬ所。丈も亦得難き太夫ある哉

峯作る雲や一と癖持ちし色



竹本津賀太夫

嚙曉の聲。流暢の節を東都人士の耳に残して曩に地方へ赴き丈が便り。待つ甲斐あつて此程御無事に歸京は何より。斯道も取り東京へ再び一ツの花を添へたる心地せり。此上どもに丈への注文。モウ何處へも行かずに居て以前に換らる咽の艶。節美しき語り物。どしどし嗜好者に聞かせられ。生きたるる女太夫の艶を込めたる耳の垢を丈が優美の節廻し。玉を轉がす嚙音に浚ひ洗はん我等の望み。丈ろを伎藝を惜まず勤めよ

鶯に洗はん日毎耳の垢

經歷

父を鶴澤重造(初代)と云ふ七歳の時豆太夫と名乗りて津島太夫の二枚目を語る十九歳の時、十九太夫と改號古朝太夫に就き後ち呂太夫の門に入り廿二歳の時新呂太夫となる明治廿年上京す



豊竹新呂太夫

斯道の名人と聞えたる呂太夫の門列に其人ありと知られたる丈の事とて何を語りてを悪かろう筈いな多れど藝人には免がれ難き得手不得手は是非もあし。丈は全躰艶といふ咽喉にあらざればサワリ張りの素人好みには適せず流暢もしくは輕妙などには歌る所あるとも元來語り振り確りとして嚴かに。可なり聲に巾もあり落付もれば如何ある駭雜たる世話場にても言語應接。着々や聞取られ語り物として聴くよりも寧ろ目前活劇を畫き出すの思ひあり。義士銘々傳彌作の鎌腹は丈の十八番中最も優れざる呼物なり其他吃又の如きも亦大旨味あるもの。將來は師の名を繼て天晴呂太夫とも成る可き腕前斯うなふてはあらぬ筈なり

雁啼くや其寂又知る秋の味

經歷

初め鶴澤清七に就て學ぶ後明治十二年竹本濱太夫の門に入つて若濱太夫と名乗り各席へ出勤す濱太夫の没後相生太夫と預けらる明治廿一年上京す



竹本若濱太夫

旨味の不味の種々の評判。取々の噂の習ひなれど五人が五人旨ひと評し十人が十人ヤンヤと褒めるは獨り丈が咽にて剛柔硬軟自在にこなす節廻しの皮肉さ加減。嚴めしきは飽く迄強く優しきは何處までも艶ツばくサワリあざと來ては奮ひ付く程の旨味まこと何處を押し此の水も滴らん計りの優しき聲音の出る事よ。去りどてい感心を咽なり。丈は全躰艶に充分あれば世話の艶物よりの太十。日吉。三代記。八陣。腰越状など時代物中の艶場の方聴答へありて旨味あり然心とて六助住家。花菱屋。小磯原などの世話物を亦大に聴くべき語物なり

金衣鳥や姿に増した聲の艶

經歴

初め竹本津賀太夫の門に入り筑摩太夫と稱し後ち縁太夫を改む



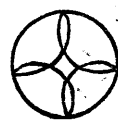
竹本 綠太夫

當時若手の賣出し太夫。男の綾之助と迄評さるゝ流行子。俳優ならを福助米藏。角力ならば小錦大砲。丈が名一さび寄席の比羅に顯はるれば客種からして違ふとはテモ扱も太した人氣。人品骨柄。躰度のおなし見臺の身構へ天晴の好男子。三代記を語れば其身三浦之助と怪まれ朝顔日記を語れば阿曾次郎と疑はるゝも結局丈が美男の一徳。さふ歎と言て伎藝の程も決して鈍うらずして何を語りても確望として旨く別て時代乃大物殊に邸もの。館ものなどは飲りよく。辨慶上使。百度平住家。岸姫松などは先づ得意中の呼物なり此機と外させ今一しはの御勉強が御肝要。譬にもソレ美人。魔多しとヨシ歎合点歎

着飾りて雨にな遇ひぞ花曇り

經歴

明治十七年一度彦六座し困難より翻て太夫となり翌年十八太夫と名乗り組太夫に就て學ぶ全廿四年六月二代目柳適太夫とあり彦六座に出勤を昨二十七年冬上京



豊竹柳適太夫

久しく組太夫の切三枚を語りて確かりとし太夫と評判され柳適丈。一度病氣あて咽に痛めし頃は兎や角と不評なりしも何しおふ名家の名前を繼いぐる丈の事とて腕に覺へのある事。艶物より時代の大物を多く語りよなす所を見ても咽の確かおれを知るに足るべし併し如何にせん聲に巾あた故。張り切る力に乏しく押の利らぬ處あるは詮方なし。去り乍ら未だ充分見込のゐる伎藝。勵み次第で行末は名太夫も成り得るものと敢て難さにわらざるべし。秋津島切腹。赤垣源藏出立等は丈が語物中巧なるもれなり

霧深し聴覺へある鐘の聲

経歴

明治十三年始
り山登太夫と
名乗る其年上
勤す後阿蘇
翌十四年歸坂
再ひ上年二月
太夫一座に加
勤り各席へ出



竹本阿蘇太夫

朝太夫一座に加入りて久しく切三枚の椅子を離れぬだきありて時代物。世話物ともにコナさると腕前は確に承知し居れども其コナし様の今少しと思える處尠くならず。聲も可なり咽も出来居る丈に事立て差して悪さといふ簡處もなければと丈は何を語りても氣の變らぬ様に聞ゆるは残念なり。侍町人の演詞にも差別あれを傾城。生娘のサワリにも種別あり丹を巧に語りこみすは唯伎藝の皮肉に宿るのミ。丈の語物中。四ツ谷怪談伊右衛門住家累物語植生村などは重なる呼物なり。丈は時代物の咽なきに非ぬと總じて世話物の方旨さ様に思はるれ其巧みなる得手の物にて人氣を呼ぶが何よ上策の道なるべし

今少し香り添へ少し白椿

七

経歴

十七歳にして
初めて斯道に
志し廿二歳の
乗り各席に出
つ。後明治
十八年の頃
改名して美濱
太夫と稱す



竹本美濱太夫

花ならば雨を含んだ蕾。月ならば雲を拂ふた十四夜。未ぶ是からどいふ修業盛りだけに語り物によりて出来不出來のほるは是非もなし。去年ら元來確りとし咽ゆへ時代の大物を可なりにコナま所の感心なれど餘り身振に氣を取らるる様見へて悪ま。先般新聲館の演藝會に語つた杵掛村の近來の大出来なりしが今少し落付ぬれを申分ふし。併し丈も此頃の國五郎一座に加はり人形専門に語り居る故か自然落付も出来。語振り貫目づきて未頼母しと賞められても評判の煽動に乗らず今一息ウント磨いて見事譽れの花を咲せ。伎藝の光を輝かしたまへ

十四夜に見て置く月の姿かあ

經歷

明治十五年竹本播磨太夫か
門に入り全廿
一年竹本明石
太夫と名を本
年十月和國の
名依繼て三代
目豊竹和國太
夫となり初め
て眞打の看牌
を神田小川亭
に掲ぐ



豊竹和國太夫

名前の古りて世に高く人に知られし看牌なれど先般該名に据ゑたる今の和
國は齡未だ若く御修業も未だ若きに似ず中々にコナさるゝ腕前。元來丈は
柄と云ひ咽と云ひ艶語りに歛りたる事とて時代の大物は宜しからねど艶物
と來ては得意の伎藝顯はれ鳥渡惚れても見度さ所あり其詞に至りては總て
歌舞伎風にやつて退多られ大層素受は宜さ様なれどコハ矢張り何處までも
義太夫調に願を度もの……とさ言ふのも人の好きさ。白石噺。鈴ヶ森。
小磯原など何れも艶受の評よさをの。丈も只今骨折盛り一と息ウンと奮ひ
勵みて行々ズン〜大物をコナされ天晴先代和國の藍より青さ譽れを待升
ぞへ

只管に花待遠き接木かる

經歷

入九才の頃方
上州政太夫の
門人女太夫政
仲の門に入て
小政太夫と各
て眞打の看牌
を掲げ各地方
を興行し識太
夫の時に識太
識子太夫と名
乗り明治廿七
年六月彼の故
網太夫の幼名
を繼て二代目
鍛太夫となる



竹本鍛太夫

識太夫の一座に伍して久しく地方興行に御修業を積れたれど耳高き東都人
に批評の鎗を受るるほど藝人に取りて藥いなし。丈も今の修業盛り。腕(舌)
咽喉をウント肥し見る見事先輩を凌ぎ越すが何より肝心。可あり聲にも乏し
からぬ咽。勉強次第で如何様にも進歩の出來得る大夫ざかり。何時までも
口三枚などは感服仕つらぬ。將來は望みある丈の事。磨けは光りの増し輝
く艶も涙も伎藝にゐること。鍛丈確かり頼み升

末いつか海となるべき清水哉

經歴

西京に産れ七歳にして初て竹門に入り太夫に就き、染と名乗り十に赴き、四歳に頭太夫に就て、夫と稱し、文樂へ出勤、明治十年上京、花澤山四郎の門弟となり、花太夫と改名、全十五歳の頃、初て看牌を掲ぐ、後、守田勘彌の勤め、浄瑠璃の歌舞伎を専ら勤む。



竹本花太夫

大凡そ百般の伎藝。何よまれ一流一派の機軸を編出し始終一徹。主義を變ぜざれば發達を計らんの中々以て容易の仕事に陥らざる。浮世の譏評を尻ども思はせ面白からぬ世人の冷笑を物の數ともせざしてこそ始めて是の泰斗と仰ぐれ。頭領と据られエライと驚かれ感心と賞らるゝに至るなれ。丈の誠に此種の人なる哉。一意思立し初一念を變せず専心不亂。鳴物入歌舞伎浄瑠璃の一派を以て廣き東都の各席を切て廻る勇氣。藝人には珍らしき熱心家あり。丈の語物中。福島中佐馬別れ。文覺上人勸進帳などは其仕掛の詠らへ中々凝たものにて他に比を見ざる丈が獨得の伎藝をいふべし。

健氣さや思ひ定めて枝蛙

經歴

二十五歳の時(明治五年)先代岡太夫(後門政太夫)の門に入り、三春太夫と稱し、上京、大竹の國小路、大竹の形芝居、西川の三郎、一座に出勤。初目見得に野崎村を歸る。後、明治十一年、豊竹若狭太夫と改名し、再婚、上京、十八年、磯太夫と改



豊竹磯太夫

若し夫れ拍子扇を把つて見臺に向へは演詞。節調。着々聽客の感と動かし、拍手の喝采と博すべき伎藝、我から態とおし埋めて専ら後進輩に指南車となす。都下幾百人の太夫お押されて頭取と仰がれ、該社界に於ける風儀上の取締りより、傍ら斯道の發達を圖る一身多忙の丈の身の上。稀れに義太夫三業組合の催しに係る新聲館、人形芝居に出勤する事あるのみ。丈が伎藝の評判は態と省きて茲に記さる。其語物の得意なるものは、縹緲錦大安寺堤。双蝶々引窓。伊賀越沼津等あり。

壹羽のら飛ち誘ひ参り磯千鳥

經歷

文久二年日本橋高砂町に生る明治十九年の春父鶴澤清阪地に赴き小清と名乗り全廿四年九月歸京全年十月中旬と看牌を掲お花友。鶴蝶。住豊等と俱ふ茅場町宮松亭に於て初席



竹本小清

當時女義太夫と言へる萬口一聲先づ小清を呼ぶる者なし嬢は語り振り確りとして聲もあり巾も有り節廻しと云ひ演詞と云ひ殊に幼兒の調子に至ては他の遠く及ばざる所如何なる駁難し多人數の場合にも一々言語調子の異なる全く別人の如く宛がら一場の活劇に接する思ほり名手腕に非ざれば克はせ。嬢が數多の語物中世に高評を博しつゝあるもれり太十。引窓。熊谷。合邦。吃又。秋津島。大安寺堤。鮮屋。鰻谷等にて就中熊谷陣屋。引窓の如きの優れて巧みなるもの男太夫中にもオサ〜比べ得べたもの尠き程なり。偕こそ女義太夫の泰斗と仰がるゝも亦無理なき次第なり

花といふ花の中での牡丹かな

經歷

十一歳の時初めく鶴澤清造の門に入後ち鶴勝。清。七。龜清等。清。七。龜學。本。東。玉。の。門。竹。本。東。玉。の。門。八。年。東。玉。と。俱。入。上。京。し。瀬。戸。物。町。伊。勢。本。全。於。て。初。席。歸。坂。十。月。一。度。歸。坂。た。び。年。八。月。再。年。九。月。東。玉。昨。京。枝。等。と。俱。に。新。陸。の。一。派。を。分。立。す。



竹本小政

女義太夫中小清み續て第二に指を折らねど者は差詰先小政なるべし嬢の久しく看牌主となりて各席に高評を博せしが一昨年頃より東玉。京枝等と俱に新陸派の旗幟を樹て今尙同派の首領と仰がれ小勢なものを押廻す徒氣さ新陸が挫きを撓まぬも全く嬢が伎藝の力。何と語りても是ごとと云ふ疵なく聲と云ひ節と云ひ先づ難乃無き淨瑠璃。嬢の咽元優美流暢にて得意物は時代より世話。寧ろ艶物にあり就中。吉田屋。十種香。仙臺御殿。朝顔宿屋。最も巧み取り然ば逆。佐倉子別。染分手綱など慈味なる悲哀物に至ても亦是れ得易うらぬ旨味あり。先い茲許女義太夫新陸派の總大將と仰ぎ申さん

咲たりな霜にも負ふで菊の花

經歷

十二歳の時始めて竹本濱壽よ就き十四才より先代和國太夫の門に入り翌年和佐吉と稱し出席明治十二年地方興行に赴き翌年四月館五郎館座に加り箱館興行中三福と改名し眞打の看牌を擧ぐ全廿四年歸京後三福の名を門人津賀蝶お譲り素行と改む



竹本素行

巧味い義太夫と聽客の耳は味を殘し三福の名を人の記憶に止めしより去て田舎を廻り歸京て素行と改名後以前に一層立勝り聲に寂さへ添ひて節廻し語り振りの澁さ何處までも垢抜のして東都人士の嗜好に適する事初松魚の如し。たごへ本場の義太夫節も異なる所ありとて上方人は誹評ば譏れ和國太夫相傳の江戸淨瑠璃とやら他嬢の眞似ても及ばぬ伎藝。得意の語物も多き中にお静禮三小磯ヶ原の事体江戸脚色なれば嬢が節調に飮りて旨い物。續いて葛葉子別。三十三間堂。忠臣講釋喜内住家なども十八番中に指を折らるゝ物なりと

江戸ッ兒の氣合味や初松魚

經歷

東京の産おして修業の爲め阪地に在る事十年。竹本住り小住と名乗り明治十九年の頃歸京し看牌を掲げて各席に出全廿五年の春睦派を脱して正義の後一派を開く後ち地方興行に赴き本年春歸京再び各席にお出勤す



竹本小住

デン海不穩の波瀾中に超然一航路を開き清玉。小土佐。住之助等と俱に正義派の一旗幟を翻へしたは最早三年前の夢。跡なく消へし浮世の様。芳むしからぬ處より都を跡に遙々と旅興行より長の年月。憂身憂して歸京の後又もや寄席へ出勤して三福の彈人となりしが先頭牛込神樂坂へ和良店亭を新築し再び花咲々昔し伎藝。章句止しく節調巧みに。其上聲お寂さへ帯びて一種幽雅の味ひあり其語物中。明烏山名屋。葛葉子別の如きい最も巧みに秀でたるもれ。何さま昔し取た杵柄。流石の鍛を込んだ老腕

住捨し庵や昔の儘の月

經歷

明治十八年一月
月郎に就澤源
次郎に就澤源
全十月より熊
太夫に從ひ全
十一月より熊
梅と名乗りて
阪地の各席に
出勤。後長
尾氏。朝等に
就て修業。全
廿四年十月上
京神田小川亭
ひて初席全十
二月厚生館よ
て壺阪を語る
是より嬢の壺
阪世に持離さ



竹本熊梅

噂の高たき木は嫉みの風に折らるるとのや艶開の誹評は藝人に免がれ難きもの
嬢も件の嫉風に遇とも知人を知る嬢の腕前。如何なる冷評を伎藝の巧は没
し得ず。嬢の壺阪。湊町の如きと得意中の呼物にて誰とて賞めぬ者なく續
て大江山松太夫住家なども亦大に聴可き物なり殊に壺阪寺は他嬢の語るも
のに比して一段の聞榮あり別て澤市の詞に至ては嬢が專賣の長所と謂ふべ
し。併し一風變りたる嬢の胎のおなし見苦しく浮調子にて實が入らぬなど
と小言を言者あれど開十八十評の世の中にく是非もなし兎に角出京以來
永らくの眞打。且や昨年以來氣に入し弾人なしとして自身彈語りの勇氣。其
勉強其見識ヒヌと感服仕つたり

取沙汰の煩さ世なり初櫻

經歷

十四歳の時越
路太夫の門に
入り初め氏喜
と云ひ後津
賀喜と稱して
翌年十五歳の
時越子と改名
して看牌主と
なる



竹本越子

同じ眞打の花方ある小房。綾之助。土佐玉。豊子。新吉等の諸嬢と異り。
サワリ専門の艶受のみに傾かぬ嬢の事とて兎角艶々しきサワリより確り
どなし聴き答へるものに巧みなるは頼母しき咽と云ふべし。然ば玉三を
語りてを金藤次の手負一等旨く。本藏下屋敷語りても伴左。本藏の詞に
巧みなるも其筈なり。殊に近來大に聲を帯び來りされば一段の聞き榮
あり。尙や此程より弾人け三吉を謝して老練ある網巴津に代りし事とる三
味線の申分なし。嬢も此機を外さを怠るなくば越子の腕をモウ止りなど
と耳取しの悪評は次第に消へて天晴先輩を凌ぎ越すの瞬く間。必ずともに
ぬかるまじぞ

春に寂またゝか添へて遠蛙

經歷

初め竹本綾瀬太夫に就て學ぶ。垂簾の頃落語の寄席に交り出てしが十歳の時眞打と勤す。各席に一度度竹本東玉に就て學ぶ。本年春頃より綾瀬太夫の助を語りて毎夜二席に出勤す。



竹本綾之助

榮枯盛衰は浮世の習。新陳交替は社會の常。順次入り代る本文にも拘らぬ嬢の明治廿一年以來久しき間の通し眞打。其間大坂、京都、阿波、名古屋、扱の岐阜なんどの諸方より年々歳々入替り立替り上京する女太夫中には腕ツこきの者ありとも其競争の場合に至れば何時も敗を取る者多きは不思議も亦嬢の全盛轉た驚くに堪へざり。然うかと言て其伎藝如何程妙手腕かと思へば然程も有ねど美音の點に至つては女太夫中その比を見せ劉曉轉玉の贊言葉も失當ならぬ。儲こそ席亭の下足累々として山を成すも宜ならずや何の兎をばれ嬢の人氣は亦格別なる哉。

人聲の山を動りす櫻りな

經歷

十二歳にして初めて先代竹本主佐吉に從ひ後ち播磨翁の門に入侍て士佐玉と名乗り傍ら梶太夫に學ぶ。三味線七文次郎。清友等。駒吉。勝學。本。年。六。月。父。を。俱。に。横。濱。に。來。り。と。途。次。招。か。れ。て。上。京。し。今。尙。各。席。に。出。勤。す。



竹本土佐玉

綾之助。越子。小房。呂久助。新吉等が相互ひに勉強競争の間又立ちてチツ共怯まを而もそれが人氣の過半を吸収せし嬢の全盛はスバラしきもの。茲年十七の咽に兎に角時代の大物。世話の艶物又は四の切三の切を語りコナす伎腕の程ヒタと感服せり併し往々出来不出來のあるは嬢に限らず何人も免れ難き事。その語物の巧みなるものを舉れば三十三間堂。阿波鳴門次で鈴ヶ森。仙代御殿等あり蝶八。玉三の如きに至てはサワリの艶場を除きて今一息と思ふ所多し。總じて腹切ものは不充分なるも年若花事として詮方なし。なれ共今一二年修業を積み重ねて寂を帯び來らば其時みとは天晴の女太夫とならん事疑ひなし。

寂てこそ秋風情あれ松の庵

經歴

九才の時豊竹
玉太夫に就て
學ふ十一歳の
時花澤柳糸へ
後に入り花澤小
房と名乗り名
古屋實生座へ
出勤傍ら豊澤
新八鶴澤勝
友に就て學ぶ
明治六年秋
朝太夫名古屋
滞在中丈に
就て學ぶ翌年
八月上京芝琴
平亭よ於て初
席



花澤小房

容貌の美なるよ、種種の冷評。様々の艶聞を世に誦はるとは其身の幸か不幸か、兎に角當時眞打ち花方。流行ツ子と言へば先づ壹番に數へらるゝ嬢人氣は押しして知る可き而已。素より郷里名古屋にて鍛ひ込んだ腕とて出京以來も馴るお早き節廻し語り振りに至るまで東都の嗜好を呑込んでくらの何時しか愛知のスカラン風も扱近來メツキリ御上達何より。語物を多き中。日蓮記。新口村。辨慶上使。柳。小牧山城中。阿波鳴門など尤も巧みなるもの。此末どもに勉強次第で未々上る伎藝されば艶聞の種を堅く慎み只だく修業が肝心要。殊に土佐玉。呂久助も強者追々顯はれ來れば何につれても御用心。蛇うくと心許する雉子の聲

經歴

十一歳の時新
呂太夫の門に
入り翌年呂糸
と名乗り三味
線を専らとし
て各席に出つ
本年八月より
呂久助と改名
して眞打の看
牌を上げ新睦
派の各席に出
勤せ



豊竹呂久助

新呂太夫の門に身を擡んで、忽然新睦に加はり呂糸の名を改めて呂久助と名乗り超然眞打の看牌を掲げ、見事一方の旗頭とあり。寡勢の孤軍。重圍の裡を奔走して毎夜二席を掛持ちの大働さ。伎藝の益々上達するも亦無理ならず。芳紀未だ二九に上らざるを轉た先輩を凌ぐの腕前。聲の巾又乏しき所、確りとした語り振り節廻しも中々巧者にて後來望みある藝なり嬢が得意の語物中。お妻八郎兵衛鰻谷の如きは最も冠たるもの。優弱き咽に語りコナして而も聽人の感を動かさしむるハ婆義太も及ばぬ所あり。尙屈せず、擡まらず修業せば新睦派の大將たるを敢て難さに非るべし

雲凌々竿ともあらん今年竹

經歷

初め湊太夫の門に入り後ち照吉より從ひ十歳の時妻吉と名乗り照吉の一座に加りて初めて名古屋の寄席お出つ其後ち竹本土佐太夫の門人となり小土佐と改名し明治十八年始めとなりて各席へ出勤



竹本小土佐

播磨翁(素の土佐太夫)が秘藏の門弟と聞ゆる小土佐嬢。先年翁より伴はれて出京以來永らくの眞打。都下各席に低くらぬ好評。其伎藝は能く優艶しき風姿に伴ふて大物よりも艶物に巧みなるの蓋し嬢が好評を博する所以かさればとて餘り艶るらざる世話物にも亦大に聴くべき物あり彼の壺坂寺の如きは中々巧みなるものにて嬢自身も之を以て十八番の語物をなし潜かよ熊梅の壺坂と其優劣の評を希ひつゝあらんとは餘計を推測う尙白石嘶揚屋。仙臺萩御殿等も前者に劣らぬ得意の物なり。先般病患以來調子稍々低くなりて聲の張に充分ならぬ所あるも開い追々回復の期あるべし幸なよ怠る勿れ

其聲お姿の見たし時鳥

經歷

八九歳の頃より姉小新の許にありて學び後ち鶴澤豊吉の門に入り後ち又鶴澤新造に就て學び新吉と名乗り明治廿六年四月より姉小新と俱に各席より出勤。本年三月看牌主となる



竹本新吉

花方は眞打中。最も後進あるを拘らず人氣おさく先輩にも譲らざるものゝるの中々以て感心なもの。流石は姉小新が年來の仕込程有り。殊に新造の薰陶を受けてより藝道頓に上達し其矧度と云ひ聲といひ打て附の敏りものは只に艶物のまと思ひの外兎に角時代は大物まで語りコナさんと言ふ熱心の程頼母しく未だ確まらぬ咽にて節癖とても知らざれば此上ども勉強次第で如何様にも出世の出来る伎藝併し如何に餘興のね負とは言へ大切りの掛合に琴や鼓を持出れば宴會の座付めさて感心せむ其手間隙を修業又換ゆるが新チャン其身のね爲めで有らざ

時雨聴く耳に鳴物あくもがな

經歷

十二歳の時初めて鶴澤豊造の門に入る明治廿六年六月竹本京枝と俱に各席に出つ後ち修業の爲め暫く休席し廿七年十一月看牌主となる



竹本豊子

一時の新陸派にて一方の看牌主となり小政と相依り相輔けて健氣に切つ廻りしが。時の場合か世の成行く本年夏の初めより休業なして彌敷町へ暖簾冷しき水店に客足を引く咄嗟の腕前。夏去り秋の來るに隨ひ。世の風潮を考へてか元木の陸へ歸り咲き再び寄席に花を飾る臨機應變の働た。神出鬼没の振舞に伎藝の上達一步を譲れど未だ齡若き嬢の咽。押の利のぬ割合には節廻し巧者にて器用な語りこなす手際。今一二年も修業を積む心其曉に人氣も八丁腕も八丁れエヲもれとある可し

機胸計れず傀儡師

經歷

十一歳の時初めて鶴澤清右衛門に就て學ぶ明治廿四年越八上京せしか入る越八没後豊澤豊玉の門弟となり福玉と名乗る各席に出つ團玉歸坂後の鶴澤大造の門に入し本年三月一度眞打の看牌を掲ぐ



竹本小大

女太夫が素人受あを買ひんとするに最も必用なるもの二あり。一は聲の美にして一は節の艶あり。而して此兩つあから乏しきにも拘らずヤンヤの喝采を博ま漫に聽客の感情を動かし語り了つて後尙は其妙所を喋々さるゝもの夫れ唯々節の巧みに。熱心。神に入るものほをばなれ。而して當時眞打の花方中獨り小大嬢に於て此伎倆のみ去乍ら嬢の元來聲に乏しけれを當人より聽客の方が苦しき場合あるハ氣毒の至りなり。金比羅利生記百度平住家。四谷怪談伊右衛門内は嬢の尤も巧みなる語物にして染分手網重井子別は之に次ぐの得意物なり

媚かぬ色奥床し木蓮華

經歷

父を竹本成太
夫と云ふ十三
歳に時初代土
佐吉に從ひ後
土佐太夫(播
磨翁)の門に
入る翌年竹本
小成と名乗る
明治十三年十
二月二代目土
佐吉と成る翌
年十月燕玉と
改名し全十六
年再び土佐吉
と名乗り全廿
六年三月上甘
茅場町宮松亭
に於て初席



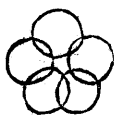
竹本土佐吉

凡そ藝人の高座に登るは恰も武士の戰場と一般その心を以て語るべしとい
嬢が常に他に語る居る所の言なり是を以ても其伎藝に於る精神の如何を
も察せらるべし宜なるのみ其語り振りの熱心なる。紅裳脂粉を粧ふて客受
を計らんとする一流と異り一意伎藝に熱注なれを好し假令人氣の點に於て
乏しき所あるとも其腕前の程は夙に人の知る所の嬢が語物中最も巧みな
るものは赤垣源藏出立。お富茂兵衛岩井風呂。覺仇討三人上戸にして阿漕
浦。叱又平。油屋十人斬等また次で得意中の物なり

飾りなき物も味あり笹粽

經歷

明治六年の頃
より岡太夫お
就て學び後お
鶴澤鶴右衛門
及び祖太夫に
從ひ後ち又鶴
澤豊造に學ぶ



和十 日本橋區田所町 和田平

玆許和合連の親玉。貳拾餘年來きたひに鍛ひ込んだ丈の咽。艶はなく共何
となう鑄を帯びて確りとせし世話物などは中々旨く常に時代の大物を好ん
で語るは覺への咽にあふされば克はぬ事。殊に段敷に當てて素人のみか黒
人にも語り得ぬ橋供養。大塔宮。など古雅ある時代の大物を語りこなす伎
藝。實以て感服の至り。取分け丈は語を振る輕卒ならずして一句一語五臟
より絞り出しか着衣流汗に浸す車輪乃熱心は何時もなみら聴く者をして満足
せしむ。丈が語物中。名筆吃又平。攝州渡邊橋供養など尤も得意なもの
なり

咲き振りの流石兄なり梅の花

經歴

初め鶴澤清四の門に入て友花と稱す明治貳年上京して先代相生太夫に從ひ住の江太夫と名乗。同十一年眞打どなぞ出席。一度廢業廿五年より再び起り素人連に入り鱗と名乗。鱗連を組織す



鱗

新橋南金六町 寺島家

目今都下れ素人連中。重なるものを舉必來されば先づ和合。鱗。淺草。新橋。鶴壽の五連なるべし。而して該中なる鱗連といゆるは實に丈が創始にして現今新橋に羽振よき腕前の程。押して知るべきのみ。時代。世話物。腹切。艶場。其時折の出來不出來はゐれども怯ますコナし退ける確かな咽流石は一連の大頭領。その名に呼ばるゝ鱗連の全盛も實又誠かや

庖丁の伊達を見するや洗鯉

經 歴

初め鶴澤彌三郎に從ひて學び。後ち豊竹駒太夫の門に入る。當時淺草連の主領た



高

森

淺草馬道 仕出屋

丈が語り振り確りとして押も利き張りも強く。其氣込の活潑なる。其言葉
又淀みなき數多き素人中稀れ見處。時代。世話ともにコナす働さ。何
處如何なる素人連の大淺へ。大集會にても正さに切前は確かな腕前。流石
は目下羽振りよき淺草連の大頭株。お千代半兵衛八百屋。伊賀越沼津等
尤も得意あるものあり

高々と森の木立や冬の月

經歷

初め豊竹岡の助に從ひ傍ら豊竹岡登齋に就て學び其後竹本綾瀨太夫に門に入りて専ら修業を



桃司

神田區田町 西藤

愛許神田の頭株と呼ばるゝ桃司丈。それ語り振り其音聲。何處までも確りとして時代物に打て付けの咽なれば常に多く大物をコナすい其筈なり。丈が得意の語り物。近江源氏佐々木隱家の如きは始終綾瀨張りにヤツて退け寸分隙間なき氣込あかく旨物。此上は今モ一倍滋味を帯びるば申分取かるべし。尙腰越狀後藤生醉。一の谷熊谷陣屋なども十八番中れをのなり

さひ鮎や月おも添ふし秋の味

經歷

慶應年中始めて豊澤廣造へ紀州藩へ就て學び後ち故人竹本呂角齋(四ツ合)に從ひ其後竹本長尾太夫。豊竹園太夫。豊竹政太夫。豊竹和國太夫。竹本綾瀨太夫。竹本相生太夫。等に就て修業



紫山

横濱尾上町 大泉

横濱の素人連と言へは先づ第一に丈の名を口にせざるものなき全盛の羽振りも全く丈が伎藝の然らしむる所にして流石に三十年來修業を積み腕前の程。左も有らんと思える。語り振を確りとして磐石の如く聲の中にも乏しからず張も利き總じて大物に絞りよね咽喉と謂ふべし。語物中。後藤生醉。龜山嘶。忠臣藏山科の如きは丈の尤も巧みなるものあり

貝寄せや眞砂の中の眞珠貝

經歷

初め前の竹本
大隅太夫に就
從ハ港太夫に
竹越路太夫及
本鶴澤豊造に
就て修業す



花柳

日本橋區大傳馬町 田澤

斯道に於ける素人連の古老家として人も許し世にも知られたる丈の伎藝。
積み重ねたる年功の程の確かに承知しふり。何さま數十年來この道に熱注
ある丈の腕前。マアーツ素人連の眞打様ならん歎。その多くの語物中。萃
源氏伏見の里。日蓮記勘作住家の如きは丈の最も得意あるものなり。

革足袋や所に古き家の株

經歷

明治七八年の
頃初て先代竹
本津賀助に從
以後ち竹本浪
彌鶴澤燕藏
及び鶴澤文造
に就て修業



梅糸

日本橋區通二丁目 天満屋

鶴壽連の梅糸か。梅糸の鶴壽連かと迄世に聞へし丈の熱心。二十年來斯道
に修業積み重ねたる事とて何を語りても旨い物。節調の句切りに聊りの
癖あるとも別段障りにもあらざ躰度の落付に自然と貫目なれば時代物にも
向き殊み静かある語物には徹りよく判官切腹の如き斯道の難物あるにも拘
らず兎に角コナシ退ける咽。夫で以て卅三間堂柳の艶ある腕前。流石く

其艶に香も有りさうぞ糸柳

經歴

初め先代の鶴澤清六に從ひ其後今之鶴澤清六に就て修業



和紫

日本橋區魚河岸 井上

丈が得意の語り物は一の谷陣屋。盛衰記逆櫓。後藤生醉など聞く。是も其咽の確かにして時代物語りたるあとを窺ふに足るべし。斯く時代の武者物をコナさるゝ事あれば出来不出来の勝敗は時の運(イヤ)伎藝の拍子にわるふとなるべし。尙安達ヶ原三段目。太功記十段目。野崎村なども前者に劣らぬ得意の物など。まづは茲許和合連の古顔

頭巾にも時代の見へて講頭

經歴

初め竹本筆太夫に就て學ぶ後ち鶴澤豊造に從ふて修業



一幸

日本橋區鉄砲町 鈴木

丈が見臺に向けた尋常さ。何處までも落付き拂けた語り振りに自然と貫目の備りて見ゆ。忠臣藏四段目判官切腹の如きは黒人にも恐らく稀なる出来にてお詠らへ向の飾り物と云ふべし。丈の調子稍々低けれども克く牙へ渡りて可なり押を利き左程苦しませに語りこなす處。旨い物なり。流石と一連の頭株とも言はるゝだ多あり。合邦。忠四。宗玄庵室などは丈が多く語り物中尤も得意のものなりと

落付けば露にを聲のある夜哉

經歷

明治廿三年頃
始て鶴澤勇紫
に從ひ勇遊と
稱し全廿七年
より竹本織太
夫に就て修業
中



勇遊

芝區日蔭町 伊勢源

新橋界隈素人連の卒先者と言はるゝ古くよりの熱心家だけありてグン〜
と腕の上るは勉強の程感心。元來聲にも乏しうらぬ咽なれど此末とも修業
次第で如何様にも上達の出來る伎藝盛り。お千代半兵衛八百屋。戀女房杏
掛村。明鴉山名屋等は丈が尤も得意の語り物。尙々ウンと勉強して時代の
大物をもコナさると様今より屹度待ち舛ぞへ

笹啼ふ梅の春さへ待れけり

經歷

慶應二年の頃
初て鶴澤駒造
に就て學び後
ち鶴澤蟻鳳太
故人竹本住太
夫。豊竹磯太
夫。鶴澤豊造
鶴澤勝七等に
就て學ぶ



孝玉

日本橋區富澤町 玉久

和合連の老骨老功家と呼はるゝだけありて流石に澁々をの。語り振り泰然
落付て悪びれぞ併し調子の一樣にて聲の變化に乏しき所あるも其節の精密
く巧みにコナシ廻す老練の伎藝。一度丈を聴くものい一聲二節の諺も其詮
なを一節二聲と言はんこそ至當あるを知らん。丈の多くの語り物中。双蝶
々引窓。子日遊俊寛物語。菅原傳授佐太村。伊賀越沼津等の得意中の尤
も巧みなるものなり

山よ寂そへて鶯老を啼く

經歷

元治元年の頃
始めて三世鶴
澤文藏の門に
入り後ち鶴澤
伊左衛門に從
ひ其後ち又故
人鶴澤蟻鳳に
就て修業す



胡蝶

京橋區靈岸島 森田

先づ素人連の中に於て指を折らるゝ株だけありて何處の會にも引けは取らぬも其筈。三十年來きたひ込んだ咽。世話物。世話物。世話物。艶物までコナし退ける腕前。流石老功の程たしかに聴き止めさり。三十三間堂柳。昔八丈白木屋などは得意中乃尤も巧みあるものなり

舞振りには花の艶ある胡蝶哉

經歷

安政三四年の頃
初めて故人
鶴澤仲助に就
て修業し後ち
今乃仲助に從
ひ傍ら鶴澤彌
市及び鶴澤豊
造と就て學ぶ



文清

神田區松枝町 中文

修業にウンと染め込んだ伎藝は商賣柄の藍よりも濃く。色めさし艶物といふ咽みのゐらざれども兎角中形の世話物の得意の如くに聴くれ。更紗の時代物なせば柄に笹らぬ様に思ひる。何しろ數十年前より賣込(否)習ひ込んだ事なれば其時々出来上りに巧拙はあれど中々馴れたもの。マーツ神田界隈の古暖簾ナニサ古株の腕ツみさサ

濃々薄く秋染配る紅葉哉

經歴

明治四年の頃
始めて野澤瀨
助に就て學び
其後竹本綾瀨
大夫及び鶴澤
門造に就て修
業す



梧 曉

京橋區木挽町 水明館

語り振り嚴然に明皎々たる眼顯の光り輝きわさり先づ聽客に重きを置かし
ひる躰度の構へ老功ならでは及をぬあど。節廻し聊り申分なきにあふねと
音聲演詞ハキ〜として心地よく何さ甘餘年來迂鳴込んだ咽喉。慾にハ
今少し寂を添ゆれば見事澁々太夫あり。楠昔噺三段目。首原寺子屋。宗
玄庵室の如きは丈が大得意の語り物ありとぞ

今少し時雨に寂よ窓の月

經歴

初め豊澤松太
郎に就て學び
後ら鶴右衛門
又本綾瀨太夫
の門に入りて
瀨太夫と名乗
り各席に出勤
せしむ故のゆ
て退後ち豊
吉に就き當時
鶴寶連の主領
なり



士 調

日本橋區蠣殻町 田中

都下幾百の素人中。巨擘と呼べるゝ士調丈。現今鶴寶連の牛耳を把つて後
進の連中。又老練家と仰ぶるゝも全く伎藝の然らしむる所か。餘り聲に富ま
ざれども語り振り巧みあるが故に左程苦しさ様にも思はれぬ。變化自在。
宛轉。輕妙。加ふるに躰度のコナしに妙を得たれば樂々と節の廻るなど流
石は昔し把つた杵柄。その語物中。重なる得意ものは四ツ谷怪談伊右衛門
住家。梅川忠兵衛新口村等なり

青梅や匂ひの花の昔し振り

經歴

明治廿四年
の頃豊澤廣兵衛の門に入
り後野澤語助に從ひ○當時鶴澤門造に就て修業



二葉

麴町區有樂町 木村

爰もと美鳥連の花方。名ハ二葉とは言へども最早盛りの腕。何處の會々づれの淡へに出るも眞打の價値は確りに備はれる伎藝。佐倉曙儀作腹切。菅原松王郎。千本櫻すし屋等は丈の最も得意なるものなり

二葉から待ちて今日あり花橋

經歴

明治十八年
始め鶴澤彌三郎に就て學び全廿二年大坂に赴き竹本津太夫は隨ひ翌年歸京後○豊澤花助を自宅に招きて修業し花助歸京後豊竹駒太夫に就き傍ら竹本綾瀨太夫に學ぶ



廣玉

淺草花川戸 加藤

淺草連中。秀藝の聞えわる廣玉丈。十年以前態々本場の坂地に行きて修業し或は斯道の師匠を雇ふて常住座臥に稽古せし伎藝は流石に旨いもれ。確りとして聴き苔へあり。義士彌作鎌腹。及び繼繼錦大安寺堤の如たは丈の得意物中最も巧みあるものなり

嫌味あき 咲振床し 杜若

經歷

明治十三年の頃始て野澤一平(先代詰助)お從ひ十九年一平病没後鶴澤豊吉の門に入り傍ら鶴澤蟻鳳及び鶴澤大造お就て修業



吉野 芝口壹丁目 石炭屋

ぞつしりとした躰格よ咽の程も推測られて聴くぬうちより待ち焦れらるゝハ丈の一徳といふべし。語り振り確りとして調子高く冴へわたり。夫で以て水の垂るゝ如き艶のあるお多多く得易からぬ咽。岸姫松飯原館の如きと最を巧みなるものゝ如し

その艶の何處から出るぞ蟋蟀

經歷

明治廿六年始て斯道に志し始め竹本住勝に就て學び後ち鶴澤海老藏に從ひ目下竹本組太夫に就て修業中



吉勝 小石川區白山前 大丸屋

「イヨ一待てました小石川」と何時も喝采聲裡に床本を頂く吉勝丈の修業を積だ語物の事とて赤垣出立。野崎村の二段ハ中々手馴れたものなり。丈は語り振り尋常にて癖のなき素直な咽。併し未だ出る聲を控へ目にする様子あり。今一息ウンと御勉強強れば小石川は愚。江戸三界の素人連に羽を延ばす丈が伎藝の程。行末頼母し腕なりかし。赤垣出立。野崎村。勘平切腹。辨慶上使。太十等は丈が得意の語物あり

飲み過ぎた程が頃なり雪の酒

經歷

明治廿一年頃
とり竹本津賀
太夫に就て學
び後ち豊澤廣
兵衛の門に入
り當時竹本織
業太夫に就て修



松鶴

新橋 花菱家

新橋連の艶語りとして隨一に押さるゝ松鶴丈。その聲の優美流暢にして滴る計りの艶ゆる咽に語りコナに得意物。娘景清花菱屋の如き凡て津賀太夫張り遣つて退ける腕前。流石に一連の頭株と言はるゝ艶語り。明鴉山名屋。本藏下屋舗なども得意中の巧みなるものあり

下戸も花上戸も花の浮世かな

經歷

明治十年頃始
め鶴澤専糸
に就て學び。
後ち豊竹駒太
夫は門お入と
當時専々修業
中



笑花

新吉原 仙稻辨樓

淺草連に其人ありと知られたる愛許笑花丈。年久しく修業を積みし事とて中々馴れさもの。元來聲に乏しからぬ咽にて艶もあり可かり押しも利けども語り振で貫目に乏しき故り時代物よりは世話物乃方篋りよく思はる。去ればにや丈が語物中。紙屋治兵衛内。桂川帯屋の段の如きは尤も得意の様お聽かる。何しろ未だくウソと見込のゐる腕前。行末頼母しき咽なまかし

是かゝの春面白し初櫻

經歷

明治廿五年
の頃始めて竹
本鱗が就て學
び後ち鶴澤大
造及び鶴澤門
造に從ふて修
業



狂樂 三十間堀 中村家

凡そ素人義太夫多しといへども丈夫と熱心なるもの恐らく類ひ尠あかるべし。節季師走も大晦日もツ、ンテンと構はず。コソは入にけりて月日を送り三重の勉強。餘處の見目には宛から狂する如くなるより倍こそ狂樂と名乗るとかや。其熱心乃甲斐ありて此頃にては見事鱗連の腕ツよきとなり。そんじよ其處らに輕うらぬ最員連まで出來しとい何よりお仕合と申すべし尙この上とを御勉強

餘念なき風情や花に狂ふ蝶

經歷

明治廿五年
の頃初て豊澤
廣兵衛の門に
入り後ち竹本
鱗に就き鱗の
前名を續て友
花と名乗り當
時鶴澤門造の
門人たり



友花 新橋丸屋町 川崎屋

鱗連は隠れなき友花丈。未だ修業れ日淺さにも拘らず勉強の精が顯はれてメキくこの昇達。師の鱗が前名を受繼いご程あり。其語り物中。佐倉の曙下總屋。日吉丸小牧山城申乃如きは丈の最を得意なるものなりとの

癖づかす生成れかし今年竹

經 歴

明治廿五年
頃より竹本
鱗に從て修
業し傍ら鶴
澤門造及鶴
澤大造に就
て學ぶ



光 昇

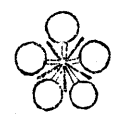
新橋三十間堀 大村家

狂樂。友花と俱に鱗連の好三對とをいふべく。語り振り節廻しも互に兄
弟甲乙の間ごあり。修業の年月まだ淺きにも拘らば。何時も大會ごらへ
の席に引参さへ取らぬ勇氣の腕前。この分取らば追付け見事か語りて
ん事請合く

句 ぶ 實 の 花 から 袖 の 待 れ 参 り

經 歴

明治廿五年
頃より鶴澤
豊吉に就て
學ぶ目下専
ら修業中



愛 玉

日本橋區富澤町 太物屋

その藝や勵ますべし。其志や賞すべしと蓋し素人義太夫に與ふべき語
が。丈は修業乃年月いまだ淺きにも拘らず何時も忠四。熊谷。辨慶おどの
大物を出さる腕前。其伎藝の巧拙い兔に角。該時代の大物を語りよなご
んづ熱心の程。凡ちらすとふべし。望むらくは此鹽梅で怠るごどなく倍
々勵み勉めなば上達出世は疑ひなしく

笹 啼 や 梅 又 聞 う さ う 下 稽 古

經歷

明治廿二年初
本綾瀨太夫を竹
鶴澤豊造に習
ひ後ち鶴澤豊
吉及ひ豊澤松
太郎あ從ひて
修業



錦

本郷區新花町 三藤

幾百人の數多き素人中。三味線を把つる該連中に鳴るもの誠々寥々として
曉天の星と一般。數ふる程もなき中に特り凜然撥笏へ高く。音の程を覺
へる丈の腕前。素人連には重寶とて彼處此處の引ッ張り風引ッ切りな
しの全盛も全く伎藝の功あるべし。望みに應じて弾く中よも近江源氏九ッ
目。壺阪。杵掛村。姫山姥等は丈の尤も得意の三味にて殊に克く弾き能
く鳴るものなり

鳴る糸の風や其日の風次第

經歷

明治廿四年始
ち就て豊竹照吉
に野澤喜之助
ち從ひ當時豊
又野澤喜之助
に駒太夫の門
に入と修業



照尾

淺草松清町 尾崎

其躰格のら見るも時代物張りにて艶物と如何と思ひの外。岸姫松飯原館
の如き何處を押せむ此の艶。此聲の出るあらんと思はるゝ位。併し聲れ
巾に乏しき故張り切る山なきは損なる語を振りふれと若し夫れ金屏菴裡。
粉裳香衣の聽容耳を傾くるの席に於て打て付けの淨瑠璃。何處までも上
品にして悪びれぬは感心。盛衰記逆櫓、岸姫松飯原館の如きは丈が
尤も得意あるものなり

琴で見る花なりけらし菊花壇

經歴

初め竹本綾太夫に就て學び太夫の門に入り當時に就て専ら修業中



得司

神田區鍋町 天徳

夙に神田側の素人として知られたる得司丈。語り振り少々く落付に乏しき所あれども熱心の故にや節廻し可なりにコナシ退ける腕前。將來なか〜に望みある咽喉なり。鏡山又助住家。彦山毛谷村。利生記百度平などい最も得意の物なりと。願くは此の修業盛りを今一と奮發伎藝を磨いて天晴と稱へられよ

雲に入る鳥や行方の廣き原

經歴

明治廿三年より竹本筆太夫に就て學び太夫の門に入り太夫の業を修業す



壽鶴

神田區岩本町 飯島

和合連の若手株。熱心家と人に知られし壽鶴丈。勉強すれば上達せむ置かねの伎藝の習ひ。間がな隙が修業に餘念なき事とて日増しに聲もしまり咽も出来。追付け一連の眞打株とならんは遠きにほらざるべし。菅原寺子屋。辨慶上使。壁仇討瀧場等ハ丈が得意の語り物なりと聞く

聞く度に知るや水鶏の嘴力

經歷

明治廿五年より斯道に志し、豊竹岡登齋の門に入て學ぶ。全年己吉連を組識を全廿六年該連を鱗連と改稱す。



白遊

京橋白魚橋 荒井家

豊竹岡登齋の門中に此人ありとは知るや白魚橋の白遊丈。未だ四五年の修業なれども熱心の精顯はれてメキ／＼との昇達ハヒタと感服せり。丈が得意の語り物の鏡山亦助住家。大安寺堤。菅原寺小屋等なり。

丹精や一と如露毎に菊の艶

經歷

明治八年頃初めて大坂の鶴澤勝八に從ひて學び後ち鶴澤勝造に就て當時修業中



勝長

日本橋區蠣壳町打紐製造所

當時。勝造の門に隠れるき勝長丈。玉三の艶物のら後藤生醉の大物まで語りコナす腕前。斯くてよそ二拾年ものかた迂鳴り込んだ熱心の咽。想ひやられて感心。花上野志度寺。玉藻前三段目。腰越狀後藤生醉などい丈の最も得意物なり。

畫顔や熱さは知らぬ花配り

經歷

明治八九年の頃鶴澤鶴右衛門の門に入りて修業し傍ら鶴澤豊造に就て學ぶ



吾豆

日本橋區濱町 南郷

こゝ許濱町の吾豆丈。明治八九年の昔しより叩き込んど腕。素人連にては古參の株なり。丈が得意の語り物は鏡山長局。伊勢物語。大文字屋等と聞きぬ

菊咲くや梅みの方の寮の番

經歷

嘉永五年始めて竹本氏太夫に學び其後ち豊竹政太夫に從ひ傍ら鶴澤彌三郎と就て修業



馬遊

淺草區馬道 大和屋

世話物。艶物をコナす素人連多まといへどもチャリに至つては甚だ少し。ひとり丈はチャリを以て得意となすと又珍らしめふべし。菅原のら子屋。岡崎新關所などは丈の尤も世に賣り込みしものなり。尙ほ眞面目なるものに至つては夏清十郎漆町。盛衰記逆櫓等また得意なるものと聞く

春の日の興や臍纏る隠し藝

經歷

明治廿五年六月頭より豊竹照吉に就て學ぶ。後ち豊竹駒太夫の門に入て當時専ら修業中



喜

樂

馬道五丁目 大坂屋

浅草連れ若手株。修業盛りの丈の伎藝。未だ是からといふ苔ながら。勉強は一雨毎に眺め築(否)聞き築がして未頼母しく今うらして御所櫻堀川夜討播州皿屋舗などの大物を手掛けらるゝ腕前中々感心。よの上ととも一と勉強して辨慶。鉄山に今一杯ドスを利かし。れわざ。お菊に益々艶を添へ。見ん事一と花咲しうまへ

色も香も未だ薄鈍き花柚かな

經歷

明治廿年の頃豊澤花助に就て學び其後豊竹照吉に從ひ當時豊竹駒太夫の門に入て修業



歌

樂

浅草馬道 仕出屋

浅草連として人に知られし歌樂丈。七八年來修業に心を苦しめたる事とく先づ切三位は確前に聴き得べし。本藏下屋敷。菅原三段目など得意に語りコナせども未だ修業盛と。勉強さかり乃丈の伎藝。今一々際の奮發が肝心かなめで御座らうぞ

初花や一と雨はしき色配り

經歷

明治廿三年始
就野澤喜七に
ち野澤喜之助
に從ひ小築と
名乗り後ち喜
雀と改名し當
時豊竹駒太夫
の門に入て修
業す



喜

雀

新吉原 福來樓

淺草連の一人として吉原に控へる喜雀丈。未だ嘴の轉り盛り追々修業の功を積みなば群れ居る雀の中にも秀でく羽を延すことも難かるまじ。阿波の鳴戸。明鴉。柳奈とは丈が得意の語物なりとぞ

真似さがる兒調のせ雲雀笛

經歷

明治廿四年の
頃より豊竹照
吉に從ひて習
ふ當時豊竹駒
太夫の門に入
て修業す



岩

勢

淺草公園共榮館 吳服店

未だ四五年の修業ながら熱心の精わらはれてメキ／＼との進歩。淺草連の艶語りど見事世間へ打て出るは最早遠からぬ中の事。随分ともに撓みなく勵みて益々得意の艶物。梅由。柳。鈴ヶ森に咽の光りを顯はす可し

流れ行く音に艶あり岩清水

經歷

明治十七八年の頃始て大坂に於る竹本若太夫に從て修業し其後豊澤松三郎及び鶴澤仙昇に就き都昇と名乗る



都昇

淺艸區代地 星野

十年前本場の大坂にて叩き込んだ伎藝とて悪かろう筈なく。演詞節調。巧者に廻し。牙へとさる音聲すややりに玉を轉がす咽の艶物。岸姫松三段目。昔八丈鈴ヶ森。仙代萩御殿などは丈が尤も得意中の呼物なり

鶯の梅に比べん聲の艶

經歷

明治廿二年六月より(八歳の時)初めて鶴澤専系の門に入り全廿五年より傍ら竹澤龍造に從て學び全廿七年より専ら龍造に就て修業す



登代

南千住町 久保田

腕前の程の先頃新聲館に演藝會の節。承知した。未だ十三四の軟弱さ咽に日吉丸三段目れ大物を語りコナし殊に五郎助の腹切といひ節といひ其巧者さ旨さ。其節二階の正面より梅檀の二葉より芳バしどの褒言葉のかとりしが實に尤も。嗚や親御のみどり君も御満足なるべし

蒼うらら噂薫るや梅の花

經歷

鶴澤民造の門人



喜多

新橋南金六町 寺島家

今は昔しと過ぎ去りし茲十餘年前。腕も咽も鳴らし歩いさ鶴澤民造の門に
此嬢ありと知られたる民子嬢。節廻し巧みに語り振りの巧者さ。行末は嘸
と思ひしうち何時しか影を見失ひしが圖らせも新橋に拍子として顯はれ鱗
連の喜多子嬢と變りてを變らぬ伎藝。其往昔よりも幾分か落付も出来一と
しや味ひを増したは何よりく

落付て聽けば厂にも秋の寂

經歷

明治廿四五年
頃より鶴澤門
造に就て學び
後鱗の門に入
て修業を



美津江

新橋

金寺島

その躰度。その構へ。其調子。正に歌澤然として義太夫にハチト不向を思
ひの外。送うして中々旨い物。節廻し巧みにして自躰優しき聲に一層艶
増して何ぞなく其語り振りの媚めさし所。一種乙力な味ひの存するもの蓋
し此一流ならでハ克はぬ伎藝といふべし

節癖のありて興あり茶摘唄

經歷

八歳の時鶴澤清六の門に入り清蝶と名乗りて各席に出勤し後藝妓となりて菱屋蝶吉と名乗る



蝶

吉

日本橋區菟町 菱屋

その以前清蝶と名乗て各席に鳴らして咽は素人とありて隠れても隠れなれ伎藝。音聲すゞやかに冴わたり節廻し優美みて宛然素人の綾之助なりと評さるゝも無理ならず。朝顔日記宿屋。昔八丈鈴ヶ森の如きは嬢の尤も得意なるものにて正銘乃綾之助に比して一步も譲らざる艶ありイヨ一菱屋萬歳と申し舛

舞ふ蝶の羽紛ふはし花乃艶

經歷

明治廿五年より豊竹照吉に就き當時豊竹駒太夫の門に入て修業す



わ

か

浅草公園 河内家

浅艸連の浅からぬ馴染の君は御存しなるべし。公園拍子に此嬢あてど知られたる若子嬢。名の躰あらで藝の其身に應じてや鏡山長局。昔八丈鈴ヶ森なご優しき咽に語り廻す聲の艶。イヤモ中々旨い物。鳥渡座敷で一とくさりは至極興あるお肴淨瑠璃なり

香走るや酒も呼ひ度き櫻海苔

經歷

明治廿三年と
り豊澤照吉に
就て學ぶ



小きん

淺州公園 千歳家

こきも同じく鳴り響いた淺州は鐘で御存じの小きん嬢。五六年以前よりの
修業に今は見事十八番ものを出来スワと言はぶ覺への咽み梁上の塵をも拂
ひ飛さん腕前。兔に角熱心の程感すべし。松王屋敷。辨慶上使などは尤も
得意の語り物ありと

鳴り過ぎて漫ろ散らせぞ花に鐘

經歷

十七歳の時元祖竹澤龍造の門に入り龍作と稱す師の没後野澤吉兵衛の弟子となり吉之助と名乗る廿一歳にまて眞打となり出席。後七年間坂地に修業し歸京後。修業助と改名し後また語息齋と改め今又語助と名乗る



野澤語助

當時都下に於る絃師の老骨家として斯道の社會に許されたる丈の伎藝。修業とともに年を積で身は老たりや雖も三昧線を把つて壇に登れば。撥聲爪音凜然として傍りを拂ひ轉た耳垢を洗ひ去るの想ひあり。流石は元祖竹澤龍作が死し臨之遺言して吉兵衛に就かしめし程なる秘藏の弟子よりしを知らる。且つろの掛聲の嚴格にして氣込に隙間なく始終一意太夫を輔ふもの老練の伎にあらざれを克はせ。宜なり目今都下三絃社會の後見を勤むる亦ゆへなきに有らざるなり

賞らるゝ程賞められて十日菊

經歷

初め鶴澤清七
み従ひて修業
し鶴澤萬吉と
名乗り竹本吟
太夫并に綱太
夫を弾く。其
後初代鶴澤豊
造に就き師れ
名を繼いで二
豊造とある



鶴澤豊造

嘗て故人竹本綱太夫并びに吟太夫の彈き人となりて世に鳴りし丈の伎藝。
年久しく引籠りて今は只だ後進輩の教授に餘念なきも知るものは知る確か
な腕前。凜然として少しも衰へ老て益々壯年を養成する健氣さ。借よそ
現今世に評判好き幾多の腕ッこさ。丈の門より輩出するを見る。實にや丈
の絃界の北斗。冴えたる伎藝の光りは明皎々として後進衆星の爲先永く世
に光を添ゆるもの。丈も亦名人に近からん乎

春待つや兒にもどかしき親心

NO

經歷

初め新し屋廣
助(前の團半)
に從ひ豊澤萬
二郎と稱し後
ち萬平と改名
鶴澤友二郎の
門に入り父の
名を繼いで竹
庄吉と名乗る
廿歳れ時上京
して鶴澤三根
造と稱し後又
歸坂して庄五
郎と改む庄六
歳の時又々上
京箱崎町(伊
左衛門)の預
り弟子をなす
花澤花楓と改
名し今又改め
稱す鶴澤蟻鳳と



鶴澤蟻鳳

在京の絃師中。改名の度數多きを恐らく丈に勝るもの無るべし。而し
て其名を更むるや多くは伎藝發達の一階段として畢竟丈が改名の都度多
多れば随つて又その伎藝の昇級多きを加ふるものなり。丈の八歳の時始め
て坂地南の芝居に初舞臺として出勤せしより今に至るまで名を更る前後七
回。丈が斯道に於ける如何に昇達せしかは上段掲ぐる所の經歷に就て窺ふ
を得へし今只だ敏腕を埋めて後進輩の教授に勤めつゝほり實に丈は鏡裏
の梅。隠れつゝ名の薫るもの乎

薫る名も人のかみや梅の花

經歷

天保九年大坂に生る嘉永二年初代清六の門に入る同六年初めで出席安政三年上京し六三郎と改名して堺町新道鱗亭へ初席元治二年六兵衛と改名し慶應二年米澤町結城座へ出勤明治三年一度歸坂し文樂座へ出勤。歸坂し文樂座へ出勤。後、蠟燭町に居して専ら後進を教ゆ



鶴澤清六

目下東京に於る義太夫節三絃の頭取技勤むる清六丈。その伎藝の評判に至りて、今更彼此いふ迄もなく老練老骨何しふふ古く結城座以來の年功。撥牙といふ掛聲といひ倍は氣合。氣込みに至るまで鍛ひこみし老腕の違つゝものなり。今や専ら後進の教授に可惜優れし伎藝をねさむも演藝席上一度三味線を把る時、咲かした昔しの花の床しく流石よ老伎老功の程感服

前髪のひかしも話れ士用干

經歷

十一歳の時初めて先代豊澤濱右衛門の門に入て學ぶ師没後豊澤廣作の預り弟子となる後ち廣作休業せしに就て豊澤廣助に従て修業



豊澤松太郎

當時名人とも呼ぶる豊澤廣助の門中に夙ふ妙腕乃聞へ高き松太郎丈。その伎藝の秀妙なるは今更評するまでもなく。世既に擧つて感服する所。只だ惜む。丈、近來多病にして先般來爲めに出席を見せ久しく敏健の撥音を耳みせざるは世間大いに遺憾とするところ。希望す。丈や幸ひに自愛して待居る世人の耳を充す所あれ

待つ人の心ともなれ時鳥

經歷

十二歳の時、豊澤仙系（後の廣作）の門に入り、豊澤仙之助と稱し、文樂座へ出勤。明治九年、竹本綱太郎と俱に上京。全十一一年一度、歸坂し、門造と改名。全廿四年、再び上京し、専ら後進を教へ、美鳥連を起す。



鶴澤門造

新橋に此師匠ありと知られたる、爰許豊澤門造丈。嘗て故人竹本綱太郎と俱に上京の折、その二枚目なりたる竹本壽太夫を弾きて、夙に其巧手の程を世に知られし、最早二た昔を前ツ方明治九年の頃なまし。此秀伎この妙腕を惜をも、只だに師匠専門に押し埋めて、近年トント寄席の壇に上らねば、隨つて評判少しく、寢入る傾さあれども、其伎藝の点に至つては、毫も寢入らず。巧手健腕、何時もあがら感服の至りなり。

閉ち籠めて、匂ひの高し床の梅

經歷

十二歳の時、澤傳吉よ就て、學ひ、豊市と名乗り、十七歳の頃、越路太夫の一路、一座に出勤。二歳の時、庄次郎と改名。明治十九年、上京。六代目豊吉と成る。



鶴澤豊吉

過ぎし明治十九年に、越路太夫ととも、上京せし、あの方。今に及んで到る處の各席。何時に變らず、評判とさき丈の腕前。撥爽や、のに音、ハ、其の播の嚴格に、其氣込の鋭く。弾き去り、弾き來りて、緩急、静噪。耳底、頓に澄、涉るが如き、想ひあり。殊に、掛聲の氣合、なほ、至つて、ハ、丈の最も、勝れし所、なるが、往々、飲酒の爲めに、此の長所を、缺くること、あると、惜む。何れ、兎も、角賣り出しの腕ツ、こき、幸に、自愛せよ。

酒寒うなるまでも、見ぞ夕櫻

經歷

文久元年京都に生れ七歳の時豊澤廣左衛門の弟子とあり安之助と稱し十一歳大坂に赴き初代清六の門に入り勤・後一度豊竹・太夫の養子となり地方に出づ歸坂後豊澤廣助と改名明治十年上京二代目廣兵衛となる



豊澤廣兵衛

目今都下幾百人の絃手中の老骨の大家の措置若手にて音色の最も優妙なるものと言はば丈を以て隨一に擧ぐべし且つ太夫を輔くるに第一なる掛聲の確りに其の意氣込に隙間なきは實に感心。流石は豊澤廣助の門に出でたる丈の伎藝。後來名人の地位に進まん事。敢て難からざるべし

青柳やぞうしてこんな糸の艶

經歷

十四才の時初代鶴澤重造に從ひ一造と名乗後左衛門平及就く明治十年上京各席へ出勤一と度清龍と名乗る。後ち地方へ出て昨年歸京。門に時豊造乃門に入る



鶴澤勝造

久しく地方を興行廻り昨年ふたとび上京後は永々寄席に鳴らえた腕をひと先おさめて師匠専門に澄まこむ勝藏丈。鍛ひこんぶ撥當り。音は兎も角掛聲氣込の鹽梅。流石は初代重造の門出。此處ろしこの淡へ。大會等へは何時も丈の出席して素人連の咽を助け。喝采の花を添へるも畢竟。丈が伎藝の世の中に持囃さるるの厚きに因る歟

名乗り出て鳥も啼けかし花日和

經歷

十才時の初て
鶴澤寛治に從
ひ其後ち先代
野澤吉彌及び
野澤大造と改
名す當時野澤
豊造門人



鶴澤大造

賣出しといふには有らぬと當時若手の腕ツこさ。上京の頃。八兵衛と言ひし時よりハズント腕も上り音ハ先爽やかに撥つくりひ巧みにして且つ掛聲の確かに太夫を助くると妙ならず。併し意氣込に至つてハ今少し乏しき所あり。何さま當時新橋界限の師匠株。曩の彌生。今の路。何れも丈の腕に因りて輔はるゝは感心なれど何時もなごら大人氣をなご三ツ大。小大の頭に居座りて可惜名腕を空まぐ女太夫の一座に埋ひるは。知らせ都合の有とは言へ丈の爲めに惜む可し

振り袖の男目立や踊りの輪

經歷

明治六年(十
二れ時)初て
故人野澤喜鳳
に從ひ後豊澤
新右衛門の門
人となり新七
と稱し出席同
十四年一と度
業を廢し全廿
三年より再び
團平の門に入
り團八を改名
し全廿五年上
京



豊澤團八

去る貳拾五年初めて出京以來。一年増しにメキ／＼の上達。流石は豊澤團平の薫陶の流れに生育ちたる程ありて撥牙へと云ひ。音ハと云を扱は構へ氣込みに至るまど凜として確かなもの且つ聽て呉れふしの野心なく一意熱心に勤むる事とて客れ満足いかばかりか。扱ふそ綾瀬が扱草して自身が弾人の豊吉に代らしめしも亦見る所ありてあるべき。此分にて怠るあく尙く修業の功を積まば將來天晴の立者となるよと蓋し遠きよほらざるべしと信ぜ

行末は錦も飾れ若楓

經歷

明治三年大坂に生る十歳の時初代野澤吉三郎の門に入文樂へ出勤明治十七年師の没後師名を襲て吉三郎と稱す翌年五代目吉兵衛に從ひ全廿三年七代目野澤吉彌となり彦六座へ出勤本年九月上京



野澤吉彌

幼稚の時より名家に就た修業に年を積み累々斯道の本場で磨き込んだ丈の伎藝。撥遣ひ巧みにして音べめ爽やかに牙へ涉り天晴の若武者。流石は文樂。彦六の戦場に顯はした手並は今東京にて二三と下らぬ老練家の組太夫を弾くと見ても確かあるを知るに足らべし。宜なり上京の日未だ淺きに似ず各席の好評。なほ此上にも怠りなき骨折りに勵みて名譽の花は東京へ見事咲し玉へ

雲に手の届く勢や初職

經歷

幼時より父若狭太夫（後ち富太夫）に從ひて學び小富太夫と稱し一度修業の爲め下坂し歸京後野澤語息齋（今野澤語助）の門に入り語之助と名乗後ち語龍と改め今又鶴助と改名



野澤鶴助

瓜の蔓に之蒴子の生ぬ譬へ。彼の富太夫と云ひし若狭太夫の子はどある鶴助丈。父が膝元の勉強のみでの事足らざとて本場の坂地で修業は年月を重ねたりしかば中々旨い物。その構へ。掛聲あどに至つては人によつて好不好的の評はあるとも兎に角若人の賣出し株。且つ丈の管に三味のみか咽の程も拙うらぎ先頃新聲館。吹拔等にての語り振りイヤモ中々エライ事。併しコハ其餘伎とも言ふべきなきを矢張り弦のみ専門に出精勉強つとめるが何とて以てお爲でムろう

氣迷ふて桃に赤啼きぞ匂ひ鳥

經歷

明治十八年十
歲にして豊澤
廣作の門に入
り出席。上京
後各席に出勤
一時父の病中
夫を彈く



豊澤 惣太郎

丈は實に豊澤松太郎丈の一子。當代の妙腕家の子と生をしだる有りて二十
歳の腕とは思へぬ秀藝。其構へと言ひ氣込みと言ひ倍の掛聲み至るまで似
ことは愚か矢張り其儘とも言ひたさ程父に似たるも道理かや。十歳の曉よ
り茲年廿歳の春秋を三味の中に生長りし丈の事。實に此父にして此子有り
將來名人と呼ばれんものと又遠きに非ざるべし

俯の 儲も 牙へさり 水の 月

經歷

十二歳乃時有
名なる鶴澤傳
吉(西京)に従
ひて學ぶ十九
歳の時鶴澤芳
三郎と改名



鶴澤 芳三郎

目下若手の賣出し中。將來有望の芳丈。上京以來熱心勉強の精見へて近
頃メキくと腕が上り。當春久太夫を彈き居たる頃にも増して若濱太夫の
弾人をなりま以來は一層撥遣を巧みに精く。其意氣込に活氣を帯び來りし
い何より嬉し。尙此上ども怠りなく油斷の立場に立寄らず勉強時汝踏越
へて上達の都よ到着せるのが肝心のちめぞと

山坂を踏みて興あれ花の旅

經歷

十五歳の時播
州の某太夫に
就て學び梅風
四年上明治廿
冠治の一座に
出勤全年六月
より豊澤廣兵
衛の門に入り
傍ら語助及び
豊吉に學ぶ



豊澤廣三

廣兵衛門下。後進の若手に似合を勉強の精か。人氣好評おさく老輩を凌ぐの勢ひ弟子兒の二三十名もあるとは大した全盛と謂ふべし隨て伎藝の程も鈍からせ。撥も動き音も牙ゆれど如何せん太夫を補ふの力に乏しく掛聲に今少しと思ふ所ゆれどもコハ修業中なる丈の事とて是非もなし行末は勵み次第で如何様にも出世の出来る伎藝盛りければ只だ勉強が肝心く

面白き春是からぞ彼岸空

明治廿八年十二月廿五日印刷
全年 月廿八日出版

定金拾五錢

版權所有

編輯人 内田茂三郎

發行兼印刷人 奥村錠四郎

發兌元 義太夫雜誌社

印刷所 建昇堂

東京市神田區元柳原町三十九番地
東京市神田區元柳原町三十九番地
東京市神田區元柳原町三十九番地
東京市神田區元柳原町三十九番地

梅沢居士作

野沢發助章

新作

支那征討記

上卷

淨瑠璃

岩城子村吟段

正後援の錢

(義太夫會々員ニ限り一割引)

近松以降諸名家作ノ院本(まる本)及ビ
大坂五行義太夫拔本(けいこ本)數百種

東京日本橋區濱町一丁目十二番地

根本義太夫淨瑠璃本大販賣所 西川儀兵衛

私發賣

色を白くし

御多しやう

ためを細に

都の水

句ひ最良にして

ひよに尤も宜し

五大坂 義太夫拔本取次所

日本橋區瀬戸物町通り
伊勢町十二番地高松事

龜屋都樂

大坂 五行 義太夫本取次所 桑太本げいそ本

- 新柄 フランネル類
- 縞無地 ケットト類
- 肩掛 掛類
- 膝掛 掛類
- 珍柄 新形トシビ類
- 角袖 モシリ類
- 御婦人用地 流行形合羽類
- 絹七ル地

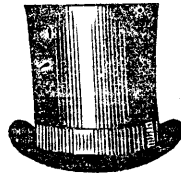


西川 孝七

日本橋區堺町通ふきや町

現金無懸直廉價販賣体

流行新形荷輸入



弊舗を歐米各國と
直約定致し品質善
良なる當時流行の
帽子を取寄せ且和
製帽子の御好みは随
の貴意の相叶ひ候様
高尙優美の調製仕
帽子の卸小賣の出精
低廉に販賣可仕候間
御購求の程伏て奉
希上候敬白

東京市京橋區南傳馬町
二丁目十一番地

山田屋 田村商塵

大日本義太夫會廣告

本會之斯道の改良發達を圖り且は同好者の
娛樂に供するを以て目的とし廣く會員を募
集し毎月義太夫雜誌を無代價にて贈呈し又
時々演藝會を催し尙且毎月二回投票抽籤の
二種法に因り後幕を贈呈す但し會費は一ヶ
月金十錢とす精細の會則は毎月發行の義太
夫雜誌々上に掲載す賛成の諸君は速に入會
あれ

東京神田區元柳原町卅九番地

大日本義太夫會